拾玉得花

問。遊楽成於当芸、年来のたしなみの条条、意曲を尽くし、成功を積みて、我意涯分の芸能をいたす事、ゆるかせならずと云へ共、即座によりて、出来時も有、又出来ぬ時も有也。故如何ぞや。

　答。諸芸の当座において、出来・出不来甲乙有。是、力なき時節と申ながら、稽古・安心をなさば、などか、出・不出の其ゆへを知らざらん。是、なをもたしなみの不及にして、おろそかなるゆへかと思ふところに、同上手、同芸風をなす当座当座にも、などやらん、昨日は出来、今日は出不来見風有。さりとては、風月延年をなす芸の身にては、かなはざらんまでも、工夫して、不審を開かん事、本意なるべし。

抑、同上手、同堪能を極めたる曲風の、当座によりて甲乙の有事、若、折節の時分、陰気・陽気の和せぬ所なるか。四気季折折、日夜・朝暮、貴賤群集の他少、広座・少座の当気によりて、芸人の時機音、時の調子の五音、相当せずば、当気一調二機三声之当気和合あるべからず。先、当日の気に、我意を念籠し合はせて、音声の曲文、時の調子に移り合て、数人の感音をなさん事、即座和合の入門也。

又、暖気・寒気、日夜・朝暮の、時節に和する音感あるべし。寒は陰、暖は陽の時なれば、陰気には陽を和し、陽気には陰を合わせて、声感を宛てがふべし。陰陽和すると者、自然、座式の、天気陰気なんどにて、物さびたる気色ならば、陰気ぞと心得て、陽声尚・永曲江月照松風吹、永夜清霄所何作を相音に休息して、音感をなすところ、是、一座成就の感応也。其感応より見風に匂ふ体風、「爰、面白」と見る数人感応也。如此、曲感に和する成就をや、出来る時分と申べき。又当座陽気かと思時は、音声に息を詰め開きて機当不当、音文陰声夜半烏鶏帯雪飛を体にして、調感を催して急尚上下、声成文、謂之音、数人の心耳を引き寄せ、引き納めて、音力をなすべし。又、たとひ秋暮・三冬陰気なりとも、若、当時の日頭もうららに、見物衆も群集したる当座にて、人気・人音なんどのみにて、しみかねたる当庭にも、相音の高声を以て、数人の心耳に通ぜしめて、為手一人へ諸人の目・心を引き入て、其連声より風姿に移る遠見をなして、万人一同の感応となる褒美あらば、一座成就の遊楽なるべし。是、先づ音感の入門より見風に移る堺なるべし。花鏡に「先聞後見」と注したるは、此心也。

　此宛てがひは、貴所、広座・少座、庭前・屋内、ないし、かりそめの座式の音曲なんどに至るまでも、其時其時の模様によりて宛てがふべき事、少しも違ふべからず。勧進・大庭の申楽は、天・地・人の三才の気に通じ、庭申楽・内能なんどは、人気の体のみにて、天気は用になる事あるべし。如此の、当座当座の宛てがいの安・不安の差別によりて、出・不出の甲乙もあるかと覚えたり。

外道、仏に問たてまつる、「昨日いかなる法をかとき給し」。世尊云く、「定法をとけり」。又云、「今日はいかなる法をかとき給ふ」。世尊云く、「不定法をとく」。又云く、「今日なにとてか不定法をとき給」。世尊云く、「昨日の定法は今日の不定法なり」。

問。誠、其折・機嫌によりて、出・不出の甲乙あるべき事、疑いなし。此芸道に、稽古長久にして、既に名を得る位になりて、「面白や」と思ふ見感、是は成功なりと見る所に、二曲の位いまだ眼前初心にて、正児姿遊風の時分にも、「面白や」と見る事あり。是は、成功の達人の面白きと、同じ心なる位やらん。是、不審なり。

　答。此段は別紙にあり。面白心を花にたとへたり。是、めづらしき心也。この心を極むるを、花を知ると云り。花伝に見えたり。

　抑、花とは、咲くによりて面白く、散るによりてめづらしき也。有人問云、「如何無常心」。答、「飛花落葉」。又問、「如何常住不滅」。答、「飛花落葉」云云。面白と見る即心に定意なし。さて、面白きを諸芸にも上手と云、此面白さの長久なるを、名を得る達人と云り。然者、面白き所を成功まで持ちたる為手は、飛花落葉を常住と見んがごとし。しかれ共、又、大かたの花を見する為手あるべし。既に九位と立てて、上三花は申に不及、中三・下位の芸にも、面白き所あらば、又その分その分の花なるべし。仮令、雑木なんどの花をば田夫・野人等の「面白」と見ん事、是、下子の見風なるべし。上三花を「面白や」と見んは、上子の見風也。礼記云、「上子聞道勤学、中子聞道如損如亡、下子聞道拍手大笑、不笑以不可有道」云。為手も見所も、その分その分の心眼也。

　爰に、私の宛てがいあり。性花・用花の両条を立たり。性花と者、上三花、桜木なるべし。是、上士の見風にかなふ位也。中三位の上花を既に正花とあらはす上は、桜木なれ共、此位の花は、桜木にも限るべからず。桜・梅・桃・梨なんどの、色色の花木にもわたるべし。ことに梅花の紅白の気色、是又みやびたる見風也。然者、天神も御やうかんあり。又云、当道の感用は、諸人見風の哀見を以て道とす。さるほどに、此面白しと見る事、上士の証見なり。然共、見所にも甲乙あり。縦ば、児姿遊風なんどの、初花桜の一重にて、めづらしく見えたるは、是、用花也。これのみ面白しと哀見するは、中子・下子等の目位也。上士も、一旦めづらしき心立て、是に愛づれ共、誠の性花とは見ず。老木・名木、又は吉野・志賀・地主・嵐山なんどの花は、既に、当道に縦へば、出世の花なるべし。かやうなるを知るは上士也。上下・万民、一同に諸花褒美の見風なるべし。上士は、広大の眼なるほどに、又余花をも嫌ふ事あるまじき也。為手も又如此。九位いづれをも残さざらんを以て、広覚の為手とは申べし。「万法一に帰す。一いづれの所にか帰す。万法に帰す」と云云。如此、その分その分に依て、自然自然に面白き一体一体のあらんをば、諸花と心得べし。しかれ共、児姿の面白さと、成功の達人の面白さも同心かとの不審を開かんがため、性花・用花の差別を申分る也。

問。抑、此「面白」と名付初めし、所得、何故ぞや。花と見るもたとへならば、たとへず知らぬ所に「面白」と云はしめし、本来如何。

答。是は、既に花を悟り、奥義を極むる所なるべし。以前申つる、面白と云、花と云、めづらしきと云、此三は一体異名也。是、妙・花・面白、三也と云へども、一色にて、又、上・中・下の差別あり。妙者、言語を絶て、心行所滅也。是を妙と見るは花也。一点付るは面白き也。

夫、「面白」と名付し事、天香久山の神楽の遊楽に愛で給ひて、大神岩戸を開かせ紿ひし時、諸神の面、ことごとくあざやかに見え初めしを以て、「面白」と名付初められし也。其際をば、面白しとも云べからず。面白とは、一点付たる時の名也。一点不付以前をば、何とか云べき。

　爰に、当道の安心に寄せて是を見るに、遊楽の面白と見る即心は、無心の感也。無心感とは、易には、誠感応の即心には心もなきが故に、感と云文字の下、心を書かで、咸とばかりを読ませたりと云。抑、大神岩戸を閉ぢさせ給て、世海・国土常闇となて、諒闇なりしに、思はずに明白となる切心は、ただうれしき心のみか。観喜なるべし。是、覚えずして微笑する機なるべし。岩戸を閉ぢ給て、諒闇にて、言語を絶たりしは妙、既に明白となるは花、一点付るは面白なり。然者、無心の感、即心はただ観喜のみか。覚えず微笑する機、言語絶て、正に一物もなし。爰を「妙なる」と云。「妙なり」と得る心、妙花也。さてこそ、九位第一にも、妙花を以て金性花とは定位し侍れ。舞歌の曲をなし、意景感風の心耳を驚かす堺、覚えず見所の感応をなす、是、妙花也。是、面白也。是、無心咸也。此三ヶ条の感は、正に無心の切也。心はなくて面白とうけがうは何物ぞ。性は物をうけがはず。然者、九位金銀性は、見風の曲文には感ずべからず。心得べし。覚えずして微笑するは、うれしきのみ也。月菴和尚云、「うれしき事は言はれざりけり」。この上を人人に次せられけると也。

　問。稽古の条条に、安き位と云り。是は、無心の感、妙花の所と、同意なるべきやらん。

答。是は安心也。ただ、無心の感、妙花、同意也。さりながら、其位の有主風を得こそ、真実の安き位なるべけれ。無位真人と云文あり。形なき位と云。ただ無位を誠の位とす。是、安位。

当道も、花伝年来稽古より、物覚・問答・別紙、至花道・花鏡是ハ当芸道ヲ誌ル帖帖外題之数数也、如此の条条を習道して、奥蔵を極め、達人になりて、何とも心のままなるは、安き位なるべし。然云へ共、猶も是は、稽古を習道したる成功の安位也。しからば、無心とはなをも申がたし。

抑、安位者、意景・態相に全くかかはらぬ所あるべし。是者、其の態を成す当心には習功意安の位也。其時は、稽古・習道を尽くしつる条条、心中に一物もなし。一物もなきと云も、又習道の成功力也。「悟悟同未子」云。自得暉和尚云、六牛第六「命根断処、絶後再甦、随類受身」云云。又云、「精金火裏逢不変、皓玉泥中有果如」云。此芸如此。中三位より、上三花を極めぬれば、下三位にまじはるも爰に、九位中三位に達して、安位を得て、上三花に至る曲位也。中初・上中・下後の次第、其為手の位、上三花の定位のままなるべし。是、砂の金、泥に連花、まじはるとも染むべからず。此位の達人をこそ、真実の安位とも云べけれ。是、万曲をなすとも、心中に「安し」とだにも思ふべからず。無曲・無心の当態なり。此位をや、本無妙花とも申べき。

　然ば、堪能・妙花の芸人の此安曲をなすを見て、初心の為手、安き所を学ばん事、天に手を挙げて月を打たんとせんがごとし。なをし、中・下三位等の為手までも心得べし。さりながら、九位においては、中三位等を習得したらん為手は、其分其分の安位に至り、下三位の分芸は、又その分力の安位をなさん事、是又子細あるべからず。ただその一体一体を得たらん曲芸は、又その分その分によりて、安曲の風体・遠見をなさん事、芸道の感用たるべし。

問。一切万道、成就云。是は、ただ自面のごとくか。又深義有か。故如何。

　答。成就とは「成り就く」也。然ば、当道においては、是も面白き心かと見えたり。この成就、序破急に当り。故如何となれば、「成り就く」は落居なり。落居なくては、心心成就あるべからず。見風成就する、面白切也。序破急流連は成就也。

　能能安見するに、万象・森羅、是非・大小、有生・非生、ことごとく、おのおの序破急をそなへたり。鳥のさへづり、虫の鳴く音に至るまで、其分其分の理を嗚くは、序破急也。是即、無位無心之成就也。しかれば、面白き音感もあり、あはれを催す心も有。是、成就なくば、「面白し」とも「あはれさ」とも思ふべからず。

長能云はく、「春の林の東風に動き、秋の虫の北露に泣くも、皆是和歌の体也」と云云。然者、有情・非情の声、皆是詩歌を吟永す。序破急成就之瑞感也。

草木雨露を得、花実の時至るも、序破急也。風声・水音にも有是。

　抑、当道の芸能に序破急の事、花伝・花鏡にくわしく見えたり。先、申楽の当庭、番数満ちて、諸人一同の褒美を得るは、其日の序破急の成就の故也。是、目出たき落居也。如此、大綱の、見物諸人一同の、目前感応の成就也。又、其番数の次第次第、一番づつの内にも、序破急成就あるべし。又、一舞・一音の内にも、面白きは、序破急成就也。舞袖の一指、足踏の一響にも、序破急あり。是は、筆作に不及。口伝有り。面白は見所一見の序破急、成ところの一風は芸人の序破急也。見所人の「あつ」と感ずる一音にも、成就有。時節の感にも、其一音、五音にかなうは、呂律の序破急なるべし。若、一音の内なりとも、謡ゐながら心もなくて、音感届かずば口伝に有、面白かるまじき也。それは、序・破までにて、急にはおさまらぬ声流なるべし。仏作事成開眼如無。まして、成就なにかあらん。さるほどに、面白かるまじき也。此意を得ずば、曲心の序破急も成就あるべからず。私云一調・二機・三声も、調子をふくむは序也。機を出すは破也。既に出声急也。此三、心耳に感をなして面白は、成就也。然者、万曲に通じて、一風・一音、一弾指の機にあたるも、序破急成就也。

荘子云、「鴨の脛短くとも、次がば憂へなん。鶴の脛長くとも、切らば悲しみなん」云。長短・大小、平同にして、おのおの序破急同。此意を所得せば、我意も序破急成就なるべし。同、我が曲風の是非をも、分明に知るべし。しからば、是は相足、非を知て是を去らば、一芸無上の堪能なるべし。堪能者、不習不安所出来得風也。此時こそ、心性の序破急も、成就・見得すべけれ。ただ、万曲の面白さは、序破急成就の故と知べし。若面白くなくば、序破急不成就と知るべきなり。恐らくは、なを此心、得事如何。奥蔵心性を極めて、妙見に至なば、是を得べき歟。能に安得の見。聞く所の数数、見る所の数数、面白きは成就也。是を上手と云ふ。不面白不成就を下手と云ふ。

　問。諸芸をなす人、面面我意分の所得有。此我意分と申は、別に心得る所あるべきやらん。

　答。この我意分と云事、当道の芸能に、心得べき事多し。先、九位においては、上三位を得たらん為手は、其風体をなさん事、我意分なるべし。是、既に上果なるべし。中三位は、又その我意分也。下三位等、みなみな、その位を得たらんにまかせて、我意分あるべし。みな、是までと心得たるばかりにて、真実の我意分にわたる所を知らず。誠の物まねに入ふさずば、この我意分を得る事あるまじき也。

　先、三体において、老体の物まねをなす事、人形云、「閑心遠目」と名付たり。心閑かにして、目を遠く見よと也。老眼霞て、遠見さだかならぬ風姿也。是、老体の風体也。是によく身なりをも心をもなして、さて二曲をいたし、立ふるまう人体をも、それになりかへりて芸風をいたさば、是、老体の我意分なるべし。又、女体は、「体心捨力」と名付。心を体にして力を捨つる心を姿に能成さば、即力はすたるべし宛てがいに、誠に成かゑりて、さて二曲をいたさば、是又、女体の我意分也。又、軍体、「体力砕心」力を体にする、その心をくだかんこと、大事也と名付。力を体にして心を砕く所を、よくよく心人に宛てがゐて、さてその態をなさん亊、是、軍体の我意分なるべし。軍体は、凡修羅の風体なれば、はたらきと者、弓箭を帯し、打つ手、引く手、うけつそむけつ、身をつかいて、足踏も、早足をつかふ心根を持ちて、さて、人ないをばなだらかにして事をばなして、さてあらかるまじき堺をよくよく心得てはたらくべし。是、軍体の我意分なるべし。

　是を、ややもすれば、悪しく心得て、軍体の「体力砕心」の身のままにて、又女体なんどになる時、「体心捨力」をば宛てがはずして、ただ、女とならば身を美しくせんと思ふばかりにて、にわかに女に似するほどに、人体萎へて、どちつかずなれば、正体なき風体になる事あり。それを、見所の人、「萎へたるぞ」「弱きぞ」なんど諫むれば、又もとの軍体の心人かへるほどに、荒くなる也。是らをば、なにとて女体の我意分とは申べきや。ただ世の常の女も、女に似せんとは思ふべからず。もとより女人と生付たるままにて、上﨟はその振舞、下女はその分にて、おのおのの振舞をいたす事こそ、我意分我意分の振舞なれ。わざと身を美しくなさんと工み、幽玄ならんと宛てがふ事、叶ふまじき事也。幽玄をしる事、一大事也。かやうなる為手は、「荒きぞ」と言へば、ただせず。「などせぬぞ」と云へば、荒くなる也。すべき事をする内にてこそ我意分、有此堺、強きも弱きも、是非の批判もあるべけれ。然者、女姿、男体の似事とは一大事なるほどに、「体心捨力」と形木を置きて、其心人になりかへる風姿、是、女体の我意分也。その宛てがいはなくて、ただ女に似せんとばかりは、女体の我意分にてはあるまじき也。女を似するは女ならず。さるほどに、女姿の有主風に真実なりてこそ似する位は無主風、に得る位は有主風也。又、甦位却来して無主風可至、女の我意分にてはあるべけれ。此分目、よくよく心得べし。老体も又如此。「閑心遠目」を心得て、その分に成入たらば、老体の我意分にてあるべし。三体いづれも如此。

　又、物狂なんどの事は、恥をさらし、人目を知らぬ事なれば、是を当道の賦物に入べき事はなけれ共、申楽事とは是なり。女なんどは、しとやかに、人目を忍ぶものなれば、見風にさのみ見所なきに、物狂になぞらへて、舞を舞い、歌を謡いて狂言すれば、もとよりみやびたる女姿に、花を散らし、色香をほどこす見風、是又なによりも面白き風姿也。然者、この位を得たる為手は、上花なるべし。是、面白き我意分也。

　又、三体の外、鬼人体なんどは、是又、申楽事の似事也。誠の鬼をば見事あるまじき也。仮令、絵に書ける鬼人体なども、似すべき形はなし。さるほどに、大かたを宛てがいて、荒かるべき道理をはづして、そのはたらきを細かに和て、人目を化かす故実の分力、鬼人体の我意分也。是を砕動風見風体と名付、又「形鬼心人」心行体とも云。此外、力動風鬼有。但、当流不可然。此宛てがいを能能安得して、其分曲を正しくせん事、砕動の我意分なるべし。

　如此、数数の物まね、二曲の習道、ことごとく偽りもなく芸体をなさん事、其曲曲の我意分たるべし。其宛てがゐ・分目はなくて、ただおし宛てがいに事をなさんとせんをば、我意分とは申がたし。さるほどに、終には、形木の定意なきがゆへに、能に味わひなくなりて、老来に成行まま、能は下るべし。心得べき事也。

　大学云、「其本乱末不治」云。物覚の其人体によりて、能能似おさむるは、是、其本也。それが誠におさまらずして、似事の曲体ゆるかせならば、有主風にはあるべからず。然者、其本乱也。末不可治。又、「果不及」云り。過ぎたるは及ばざるに同じと也。物まねの其堺、少しも足らざらんも、余りたらんも、其本にてはあるべからず。此有主風此有主・無主風の位、至花道に有りに真実成入ならば、似と思ふ心、又不可有。是を、誠の物まね、有主風とは云べきなり。此曲堺の態風に入ふしたらんをこそ、定位本風の我意分とは申べけれ。

　孟子云、「為不固、能為固」云。習似る事は、大かた子細もなくて、見風なだらかなるは、する事の難きにあらぬ分也。真実其物に成入て名を得る事は少なし。是、能する事の難きなるべし。「似たる事は似たれども、是なる事は是ならず」と云。類して不斉、混知所。此是をよくよく安位して、達人長名の其物に至らん事を可得。

此一帖、当芸習道之秘伝也。爰、金春大夫、芸能見所有依、為相伝所、如此。

　　正長元年六月一日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　世阿　花押

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　はんまでうつす

　　もしほ草かき置く露の玉を見ば磨くこと葉の花は尽きせじ

此一帖、若年之時、師家之伝所也。

　　　　享徳弐年八月日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　氏信　花押

ぜんちくのはんまでうつす

もしほ草の花も玉藻もかき集め見れば鏡の裏も曇らず

金春八郎

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　秦安照　花押